

塩川正十郎先生をお偲びして

玉岡憲明

私達、新宮山彦ぐるーぷ一同が敬慕している塩川正十郎先生は、この平成二十七年九月十九日、九十三歳を一期として御逝去されたのである。

最近暫らくご無沙汰申し上げていたので、一度主だった者で御見舞い方々ご機嫌伺いに参上したいものと話合っていたのであるが、とうとう遅きに失して申し訳ない事となってしまった。

告別式のこの日(九月二十四日)は、吹田市の桃山台・千里会館で執り行われるとのことで、取るものも取り敢えず川島代表と私共親子が葬儀に参列させて頂いたものであった。

幸い大阪での仲間、森脇久雄(寝屋川市)と梶野照雄(堺市)も参加してくれて、葬場で合流出来たのは何よりであった。

何しろ自民党と塩川家の合同葬で一、五〇〇人からの大勢の参列者に加えて、小泉純一郎元総理や福田康夫元総理の大物政治家も来会なされて、弔辞や葬儀委員長挨拶など、塩川先生を偲ぶにふさわしい厳かな告別式であった。

人混みの中にもお会いする大阪事務所にお勤めの秘書、吉川和子さんにお会いしたが、落胆甚だしい様子で大変沈んでおられた。いまお一人の東京事務所の吉川由紀子さんは、おそらく電話の応対等で忙しくしておられるのであろう、お見えでなかった。

大きな人柱を失ってその御心中を推し測るのは難しことであった。

一般の焼香者の順番となり、改めて先生の温顔のお写真を仰いで、永い間お導き下さった先生の御恩に報いるべく決意も新たにされた次第である。

想えば、行仙宿の建設許可申請の際、先生の口添えもあり、すんなり認可され、激務の合間に「山林抖擻」の扁額を揮毫して下さいました。又、十年前先生から電話を頂戴して「少しヒマが出来たので、あんた方の造った山小屋へ一度見に行つて来ようと思ふ」との嬉しいご連絡を頂き、水鳥の飛び立つ想いで登山路の整備やお泊り頂く管理棟の片付けに、大童になつてその日をお迎えたのであった。

行仙宿山小屋建設以来、初めての大物がご来宿頂いたのである。山小屋建設以来の壮挙と言わねばならぬ。

先生も想像以上のたたずまいに「ようやったなあ」と感服して下さい「これは東京に帰つてから学生達(東洋大)にも一席講演する」と仰言つて下さつておられた。その上、先生近著の「佳き凡人をめざせ」の巻末に、この日の感動を加筆して下さいました。

先生のご逝去日は、時あたかも太古ノ辻に千日刈峰行(第一次)で奥駈道が再興された記念道標「これより・大峯・南奥駈道」が更新された日であった。

太古ノ辻とは、大峯ど真中に位置しており、これより南の本宮へは、当時笹に覆われてとてもまともには歩けない状態であった。

それを故前田勇一さんという方が「奥駈葉衣会」を結成して「さびれた南奥駈の道をよみがえらせ、日本の古い精神文明を見直そ

う」と発起されたのであった。前田勇一さんは、塩川先生ともつながりがあったて、私達の新宮山彦ぐるーぷともご縁がつながるのである。

塩川正十郎先生と前田勇一さん共々、私達の活動を見守って下さるに違いない。

尚、内閣賞勲局から平成十二年十一月七日、塩川先生に最高勲章に値する「勲一等旭日大授章」が贈られた。このような偉い方にご愛顧を頂いた新宮山彦ぐるーぷである。

この御恩顧に報いるべく、努力を積み重ねて前進したいものである。

謹みて先生の御冥福をお祈り申し上げます。

山彦を代表して 玉岡憲明 謹呈